

計画 3-2

チンパンジーとヒト幼児（健常児・自閉症児）の空間認知に関する比較・発達の研究

筒井紀久子（東京農工大）

チンパンジーとヒトを対象にした、「物と空間認知」に関する研究をおこなった。対象となったチンパンジーは、犬山のコミュニティーで飼育されているアイ、ペンデーサ、クロエ、ボボ、パンの5個体で、いずれも女性の成体である。ヒトは、犬山市立の障害児通園施設に通園する、ダウン症あるいは自閉症と診断された未就学児童である。予備的研究として、以下の2つを検討した。第1は、ピアジェらによるいわゆる「3つ山問題」を念頭に置いて、視点の変換に関する課題である。被験者に、見たもの（物の遠近や左右の配置）を、ミニチュアで再現するよう要求した。第2は、ブレマックの考案した「福笑い課題」である。チンパンジーならびにヒトの顔の輪郭が描かれた図版を用意し、そこに、眼、耳、鼻、口といったパーツをあてはめる。結果として、チンパンジーのばあいは、「3つ山問題」を解くようなかたちでの視点の変換を積極的に支持するような資料は得られなかった。また「福笑い課題」についても、パーツを積み上げる、縁に並べて配置する、といった反応が顕著で、パーツを適切に配置して顔を構成するような積極的な証拠は得られなかった。ヒトについて、同様の課題を「参与観察」のかたちで実施し、その資料を解析中である。なお、武田庄平、川合伸幸、両氏の指導に対して深謝したい。

計画 3-3

チンパンジーの子どもの遊びの発達：ひとり遊びと社会的遊びの発達

関根すみれ（林原自然科学博物館）

東京都多摩動物公園、林原自然科学博物館に飼育されている子どもチンパンジーを観察し、遊びの中で「他個体」や「物」といった「操作対象」をどのような「動作」の連なりによって扱うか、その加齢変化について検討した。また、運動場内に属性の異なる3種類の遊具を導入し、物の属性が個体の「物の操作」に与える影響を検討した。その結果、3～6歳児でひとり遊びよりも社会的遊びが多かったのに対し、10ヶ月児ではひとり遊びの方が多かった。物を介して他個体と関わる遊びは5、6歳児でより頻繁に観察された。年長個体の遊びではバウトが長く連なり遊びがより長く続いた。また「長さのあるもの」や「形が変わるもの」が関係づけの操作を誘発しやすく遊びの継続性も高まった。これらのことから、1) 10ヶ月児と3歳児以上では遊びについて異なる発達段階にあること、2) 年長個体では手持ちの動作を効果的に組み合わせることで他個体との動作のやりとりや物の操作をより長く継続できること、3) 物の属性の相違は、個体が物を扱う動作の違いを生むとともに、物を介する他個体とのかかわり方にも異なる効果を与えることがわかった。

計画 3-5

注視時間課題をもちいた霊長類の認知発達の比較研究

橋彌和秀（京都大・院・教育学研究科）

ヒトでは、報告によっては生後数日から、異なる表情（例えば笑顔と悲しみ顔）間の弁別が可能であるという報告がある。しかし、異なる表情間の物理的差異を検出可能であることと、表情をコミュニケーションシグナルとして認知し「理解」可能であることは必ずしも同一ではない。現時点では、表情に対する乳児の反応を実験的に検討した例は少なく知見も限られている。